



TITLE:

系統研究部門(I 研究所の概要)

AUTHOR(S):

江原, 昭善; 野上, 裕生; 相見, 満; 瀬戸口, 烈司; 松本, 眞

CITATION:

江原, 昭善 ...[et al]. 系統研究部門(I 研究所の概要). 霊長類研究所年報 1986, 16: 26-28

ISSUE DATE:

1986-09-30

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/163665>

RIGHT:

Kyoto University Overseas Research
Report of Asian Non-human Primates,
4 : 5-17.

- 2) Takenaka, O., Hotta, M., Kawamoto, Y., Suryobroto, B. and Brotoisworo, E. (1986) : Origin and evolution of the Sulawesi macaque. II. Complete amino acid sequences of seven β chains of three molecular species. Kyoto University Overseas Research Report of Studies on Asian Non-human Primates, 4 : 19-33.

学会発表

- 1) 竹中晃子・竹中 修・高橋健治 (1985) : カニクイザル・ヘモグロビンの鎖の一次構造。第58回日本生化学会大会, 仙台。
- 2) 中島たみ子・宮崎生子・小暮正久・石川 研・竹中 修 (1985) : 霊長類のABH抗原と糖転移酵素について。第58回日本生化学会大会, 仙台。
- 3) 森山昭彦・佐々木實・竹中 修 (1985) : プタ筋ポストプロリンエンドペプチターゼの基質特異性とペプチド限定分解への応用。第58回日本生化学会大会, 仙台。
- 4) 服部正平・竹中 修・榊 佳之 (1985) : 原猿KpnIファミリーのDNA構造。第58回日本生化学会大会, 仙台。
- 5) 竹中 修・堀田美佳・バンバン・スリョプロト・エディ・プロトイスウォロ (1985) : スラウェシマカク, 起源と進化。I 電気泳動法によるヘモグロビンの分析。第39回日本人類学会, 筑波。
- 6) 浜田 稔・竹中 修・渡辺 毅・バンバン・スリョプロト・川本 芳 (1985) : スラウェシマカクの形態学的研究 : 体色の比較。第39回日本人類学会大会, 筑波。
- 7) Takahashi, K. and Kageyama, T. (1985) : Pepsinogen activation mechanisms, Aspartic proteinases workshop, Tokyo.
- 8) 景山 節, 高橋健治 (1985) : 脊椎動物におけるペプシノーゲン群酵素の分子進化。第44回日本生化学会中部支部例会, 津。
- 9) 景山 節, 高橋健治 (1985) : ペプシノーゲンの活性化-ペプスタチンとの相互作用。第

58回日本生化学会大会, 仙台。

- 10) Nakamura, S. (1985) : A coupled amidolytic assay for leukocyte thromboplastin (tissue factor) using a fluogenic substrate, BOC-VAL-PRO-ARG-MCA. 10th International Congress on Thrombosis and Haemostasis, San Diego, USA. Thromb. Haemost., 54 : 199.
- 11) 中村 伸 (1985) : 単球・マクロファージ tissue factor アポタンパク質の精製と諸性質。第58回日本生化学会 (東京)。生化学, 57(8) : 1110.
- 12) 中村 伸, 鈴木幸雄, 原田孝之, 森川 茂 (1985) : ヒト悪性リンパ腫および白血病由来の培養細胞株における Tissue Factor 産生能の比較。第8回日本血栓止血学会 (岐阜), 抄録集 : 134.
- 13) 中村 伸 (1986) : 活性化単球・マクロファージ Tissue factor : そのアポタンパク質の精製と性状。日本薬学会第106年会 (東京), 要旨集 : 253.
- 14) 浅岡一雄, 田之倉優, 高橋健治 (1985) : サル骨格筋パルプアルブミンの精製および分子性状。第58回日本生化学会大会, 仙台。
- 15) 佐々木卓治, 田之倉優, 浅岡一雄 (1985) : ウシガエルパルプアルブミンの全一次構造。第58回日本生化学会大会, 仙台。
- 16) 村山裕一・桜山のり子・羽柴克子・野口淳夫・深尾 立・石田貴文・山本興太郎・竹中 修 (1985) : ニホンザルT細胞抗原を認識するモノクローナル抗体。第15回日本免疫学会, 福岡。

系統研究部門

江原昭善・野上裕生・相見 満・瀬戸口烈司・松本 眞¹⁾

研究概要

- 1) 霊長類各分類群の比較形態学的研究

江原昭善

1. ヒトおよび霊長類の下顎骨の機能的・形態学的研究。

-
- 1) 研修員

2. ヒトおよび霊長類各分類群における頭蓋底部と posture の関連。
- 2) エチオピアにおける化石霊長類および化石人類の研究
江原昭善
- 3) 東海地方先史遺跡出土人骨・動物骨の研究
江原昭善・相見満・松本眞・木下實
- 4) 東海洞窟遺跡の人類学的、先史学的研究
江原昭善・相見満・松本眞・木下實
- 5) 霊長類の歯の組織学的研究
野上裕生
- 6) 南アメリカの第三紀の地史学的研究
野上裕生
- 7) ジャバにおける第四紀哺乳類の研究
相見 満
- 8) スマトラにおける霊長類の形態学的研究
相見 満・松本 眞
- 9) 第三紀食虫類・原猿類および有袋類の研究
 1. 南米出土化石について
瀬戸口烈司・名取眞人
 2. 南米大陸とヨーロッパ大陸出土の第三紀食虫類化石の対比

論 文

- 1) Nogami, S. and Natori, M. (1986): Fine structure of the dental enamel in the family Callitrichidae. *Primates*, 27: (2)
- 2) Aimi, M. and Aziz, F. (1985): Vertebrate fossils from the Sangiran dome, Mojokerto, Trinil and Sambungmacan areas. in Quaternary geology of the hominid fossil bearing formations in Java. (Watanabe, N. and Kadar, D. eds.). Geol. Res. Development Centre, Bandung, Spec. Publ. no. 4: 155-197.
- 3) 瀬戸口烈司 (1985): 分子変化率は一定か—古生物学からの分子時計への疑問—。人類誌, 93: 287-301.
- 4) Setoguchi, T. (1985): *Kondous laventicus*, A new ceboid primate from the Miocene of the La Venta, Colombia, South America. *Folia Primatol.*, 44: 96-101.
- 5) Setoguchi, T., Shigehara, N. and Cadena, A. (1985): *Kondous un nuevo primate ceboide de el Miocene de La Venta*, Colombia. Kyoto Univ. Overseas Res. Rep. New World Monkeys, 5: 1-5.
- 6) Setoguchi, T. and Rosenberger, A. L. (1985): Some new ceboid primates from the La Venta, Miocene of Colombia. *Memorias: VI Congreso Latinoamericano de Geologia*. Tomo 1 (J. Valdiri W., Ed.): 287-298.
- 7) Setoguchi, T. and Rosenberger, A. L. (1985): Miocene marmosets: First fossil evidence. *Intl. J. Primatol.*, 6: 615-625.
- 8) 瀬戸口烈司 (1985): 食虫類モグラ科 2 種の第 1 小白歯の交換。歯基礎誌, 27: 828-833. (花村 堅と共著)
- 9) 瀬戸口烈司 (1986): 分子進化の速度は一定か? 科学, 56: 240-243.

総説・報告

- 1) 江原昭善 (1985): 霊長類研究の歴史。霊長類をどう理解するか。霊長類の内臓諸器官。霊長類の起源と系統。霊長類の分類。江原・大沢・河合・近藤編 “霊長類学入門”, 1~67. 岩波書店。
- 2) 江原昭善 (1985): 化石からみた人類系統論。“遺伝” 39: 4-9. 裳華房。
- 3) 江原昭善 (1985): 人間生活の将来と体育・スポーツの役割。日本体育学会第36回大会シンポジウム。日本体育学会特別シンポジウム。p. 5.
- 4) 江原昭善・松本 眞・木下 實 (1985): 炭焼平第 38・39号墳出土の人骨について。炭焼平第 37・38・39号墳発掘調査報告書。愛知県宝飯郡一宮町教育委員会。
- 5) 江原昭善・松本 眞・木下 實 (1985): 松崎貝塚出土の人骨について。松崎貝塚第 2 次発掘調査報告書。愛知県東海市教育委員会。
- 6) 江原昭善・松本 眞・木下 實 (1985): 椿洞 2号墳出土の人骨について。岐阜市教育委員会。
- 7) 江原昭善・松本 眞・木下 實 (1986): 朝日西遺跡出土の人骨および犬骨について。愛知県教育委員会。
- 8) 江原昭善・松本 眞・木下 實 (1986): 根

方第二岩陰遺跡出土の頭骨について。京都大学霊長類研究所。

- 9) 野上裕生(1985): サルの歯とりん灰石。モンキー, 29(201, 202): 35-37。
- 10) 相見 満(1985): 「ヤクシマザル」か「ヤクザル」か。モンキー, 28(3, 4, 5): 45。
- 11) 相見 満(1985): 「ニホンザルの学名」その後。モンキー, 28(6): 24-26。
- 12) 松本 眞・相見 満(1985): コノハザル(リーフモンキー)のプロポーショナルについて。モンキー, 29(1, 2): 38-41。
- 13) 松本 眞(1985): 北モンゴル出土の化石はコロブスモンキーのものか? モンキー, 29(1, 2): 41。
- 14) 松本 眞(1985): 大後頭孔はどのように動いたか。季刊人類学。16: 29-43。

学会発表

- 1) 江原昭善・松本 眞・木下 實(1985): 朝日遺跡の人骨および犬骨出土状況について。第39回日本人類学会。日本民族学会連合会。
- 2) 相見 満(1985): コノハザルの分布の展開—スマトラの例。第39回日本人類学会。日本民族学会連合大会。
- 3) Setoguchi, T. and Rosenberger, A.L. (1985): Some new ceboid primates from the La Venta, Miocene of Colombia. VI Congreso Latinoamericano de Geologia, Bogota, Colombia, S.A.
- 4) 瀬戸口烈司(1985): 根井の式の分子時計としての有効性。第39回日本人類学会・日本民族学会連合大会。
- 5) Rosenberger, A.L. and Setoguchi, T. (1986): Fossil marmosets ... and more ... from the La Venta Miocene of Colombia. 55th Annual Meeting of the American Association of Physical Anthropologists, Albuquerque, New Mexico, USA.
- 6) 松本 眞(1985): マンドリルの突顎と分類上の意義。第39回日本人類学会。日本民族学会連合大会。

ニホンザル野外観察施設

岩本光雄(施設長・兼)・東 滋・渡辺邦夫

本施設の運営は上記3教官のほか、川村俊蔵・和田一雄・鈴木 晃によって進められた。昭和60年度の各ステーション関係の状況は次の通りである。

1. 幸島観察所

今年度は五百部裕による「ニホンザル幸島群におけるメスの社会関係についての研究」、室山泰之による「ニホンザルのグルーミング行動に関する社会生態学的研究」、樋口義治による野外でのオペラント学習実験などが行われた。また特定研究「生物の適応戦略の一環として、イモ洗いなどの文化的行動の解析(河合雅雄, 渡辺邦夫, 霊長研; 樋口義治, 愛知大)や第三者による争いへの介入・援護といった利他的行動の実態(渡辺邦夫)などの研究が行われた。昭和60年度に島を訪れた研究者は延339人, その他に大学や報道機関等の関係者の訪問が延186人にのぼる。昭和61年3月末日現在, 島内のサルの個体数は主群74頭, マキ群12頭, ハナレザル8頭の計94頭であった。

2. 下北研究林

M群について非積雪期の長期連続追跡が試みられた。まず4~6月, 岡野美佐夫(北大・文)が, 社会生態の研究を行い, この群れの行動域が大畑川流域におよび40kmを越すことを確かめた。11~12月綿貫 豊・中山裕理が, 冬ごし前の採食生態の研究を行った。12月と3月に西北部の地域個体群のセンサスをめざした調査, 1月にM群と分裂群A_{RA}の遊動の同時追跡調査が試みられた。これらの結果, 過去10年余の間「択伐」あるいは小面積皆伐が行動域内で進められたI, Zの両群では, 1982年以後個体数が減少しており, (Z: 63→84, I: 59→61→40)これらの群れでは1983~4年の厳しい冬に高率の死亡が発生したと推測される。

生息環境評価の側面では, 11月に荻野和彦, 二宮生夫(愛媛大・農)によりヒバ林施業跡地永久プロットでの最新の調査(10年目), また9~11月に森 治(大畑小)・和田 久(大湊小)らがリタートラップによる果実生産量の測定(初年度)を行った。

3. 上信越研究林

横湯川流域の植生とseed trap法による果実生産量の調査(小見山章, 岐阜大), 志賀C群の生態, 行動調査(陸 育ら, 東京農工大), 志賀A₂群の生態調査(長谷川寿一, 東大)が, ひきつづき行われた。山本教雄(志賀高原野外博物館),